

1. 流域の概要

高津川は事業区域の南西部、1市5町1村を流域とし、長さ81.1 km、流域面積1,080 km²と中国地方でも屈指の大河川である（図4-1）。流域は南北44 km、東西40 kmにおよび、面積の91%は山地で占められ、平地はわずか9%を占めるにすぎない。

高津川は降水量の多い西中国山地に源を発し、北東-南西方向の谷に沿う支川（高尻川・福川川等）を合わせ、穿入蛇行しながら北流し、日原町で津和野川、益田市横田で匹見川を合わせ、さらに益田平野に入って白上川を合わせて日本海に注いでいる。

流域の地形をみると、全体的に平地に乏しく、急峻な山地となっている。しかし本川最上流部の六日市付近は谷が開け、錦川水系の宇佐川による河川争奪地形が発達している。福川川合流点から津和野川合流点までは谷幅が狭まり、穿入蛇行をしながら典型的な先行谷を形成している。これより下流は再び谷幅が広まり、横田盆地・益田平野等の沖積平野を形成している。匹見川は本川の中流同様に谷幅が狭く、穿入蛇行を繰り返しており、上流では表匹見峡・裏匹見峡といった急な渓谷を形成している。丘陵地帯の中を蛇行する白上川は比較的谷幅が広く、上流まで谷底平野が形成されている。高尻川および津和野川下流部は西中国山地特有の北東-南西方向の断層に沿って発達している。また福川川はやや谷幅の広い蛇行する河川である。



図4-1 高津川流域図

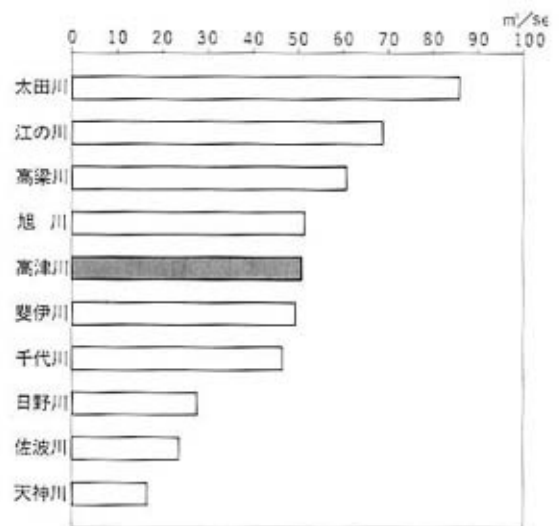


図4-2 中国地方の一級水系の平均流量
(資料:「河川便覧(1988)」日本河川協会)

流域の地質は下流部が主として古生代二畳紀～中生代三畳紀の粘板岩類（鹿足層群）から成っており、上流部は主として中生代白亜紀の流紋岩類（匹見層群または阿武層群）からなっている。また河川に沿う地帯には沖積層や洪積層が分布している。

流域の気候は、下流部は対馬暖流の影響で年平均気温 14～15℃と比較的温和で、年間降水量は 1,800 mm 程度である。上流部は年平均気温 12℃以下、年間降水量 2,000～3,000 mm の森林地帯である。この上流部の豊富な降水量が、高津川の流量の源である（図 4—2）。

流域内の土地利用をみると、全面積の 89% は林野で、その 7 割近くは天然林である。農耕地は河川に沿って分布し、河口付近の沖積平野の大部分は益田市の市街地によって占められる。流域内には高津川の水資源と流域の自然を利用した産業が発達している。益田市は古くから交通の要衝として栄えた流域内最大の商工業都市で、木工業・紡績業が発達する。津和野川上流の津和野町は「山陰の小京都」と呼ばれる古い町並みを残した観光地で、年間 100 万人を超える観光客が訪れる。日原町は林業・木材加工業が主な収入源で、近年には町の活性化を目的とした日原天文台が建設された。柿木村では川の清流を利用したワサビや茶・シイタケの栽培が行なわれている。六日市町は古くから宿場町として栄え、現在の主産業は農林業である。匹見川上流の匹見町には溪谷美で知られる匹見峡がある。